研修報告

アメリカの美術館

高階秀爾

私は，ロックフェラー三世財団の招きによって，1967年9月から1968年3月まで，7か月にわたってアメリカに滞在し，その後，欧州各国を周遊して，昨年6月帰国した。アメリカにおいては，ホノルル，サンフランシスコ，ロスアンジェルス，ニューヨーク，ワシントン，リッチモンド，ウィリアムスバーグ，バルティモア，フィラデルフィア，ボストン，ウィリアムスタウン，ノーサンプトン，ウースター，ケンブリッジ，バッファロー，クリーヴランド，デトロイト，シカゴ，ミネアポリス，シンシナッティ，セントルイス，カンサス・シティ，ニュー・ヘヴン等の諸都市を訪れ，美術館，博物館，研究所，大学，図書館等を視察見学した。以下，私の視察したところにもとづいて，アメリカの美術館の特色を述べてみたい。

アメリカの美術館は，ヨーロッパの場合と違って，大部分のものが民間の財団，または基金によって運営されている。もちろん，そうは言っても，例外も少くなく，例えば最も著名なものでは，ワシントンのナショナル・ギャラリーは，その名の示す通り連邦政府の予算によって運営されているが，しかしそのナショナル・ギャラリーでも，作品購入費だけは政府の予算によらず民間の寄附に依存している。私がアメリカ滞在中の1967年に，メロン・コレクションで知られるメロン家がナショナル・ギャラリーに対して邦貨約20億円に上る購入費を寄附して話題を呼んだが，このように大口の場合はそれほど始終ないとしても，民間からの寄附は充分に必要な購入費をまかなうことができるようである。そして，例えばレオナルドの《ジネヴラ・デ・ベンチの肖像》のような大物の購入が問題になった場合は，そのために特に寄附金を集めるということも行なう。さらに，直接お金を寄附せず，自分で作品を買って作品そのものを寄附する篤志家も少くない。したがって，ナショナル・ギャラリーの場合も，厳密に言えば国立と言うよりも，政府と民間の協力によって運営されていると言うべきであろう。

本来国立でありながら，部分的に民間の協力を得ているナショナル・ギャラリーとちょうど逆の場合が，ニューヨークのメトロポリタン美術館である。ここはもともと完全な私立美術館であったが，現在では建物の維持費，および専門以外の職員，傭員の人件費はニューヨーク市が負担している。つまり，私立の美術館であっても，メトロポリタン美術館くらい大規模で公共性の強いものには，市当局も積極的に協力しているのである（メトロポリタン美術館は，近くその建物を大幅に増築する計画を進めているが，その敷地がニューヨーク市のセントラル・パークのなかにあるので，この点でも市が大きく協力している）。

さらに，アメリカでは，ハーヴァード大学附属のフォッグ美術館や，エール大学附属の美術館のように，大学の施設の一部として美術館が運営されている例が多い。ハーヴァードやエールのような私立の場合は当然美術館も私立であるが，例えばカリフォルニア大学のような州立大学の場合，附属美術館もむろん州立ということになる。また，ペンシルヴェニア大学のよ

うに，民間と州との双方の協力によって運営されている大学（および附属美術館）もある。
アメリカでは，公立，私立を問わず，美術館は社会教育的役割りを重視しているので，入場料は無料のところが大部分であるが，私立美術館では，時に独自の料金を定めているところがある。ニューヨークのグーゲンハイム美術館や近代美術館がそうである。特に，近代美術館は，常設展示のために1ドル25セント（邦貨約 450円）という高額の入場料を課しているが，これはアメリカでは例外的であり，館員のなかにも批判的な人が多い（もっとも，特別展があっても，普通は同一料金のままである）。
入館料が無料という点のみならず，社会教育的配慮が大きいことも，一般にアメリカの美術館の特色である。すなわち，講演会映画会や美術講座を常時催し，実技指導や児童教室のようなものを設け，定期的に演奏家を招いて音楽会を開催したりするところも珍しくない。例えば，ワシントンのナショナル・ギャラリーでは毎週日曜日に室内楽演奏会を開いているし，ニューヨークのフリック・コレクション美術館でも，毎週の美術講座のほか，毎月一回招待講演および音楽会を催している（いずれも入場無料）。
また，どの美術館も，充実した図書室，資料室を備えて研究者に公開したり，スライド資料を学校に貸し出したりするサーヴィスを行っている。図書室の運営もいろいろなケースがあるが，普通アメリカの町には大きな公共図書館があってかなり自由に一般の人びとに閲覧，貸出しのサーヴィスを行なっているので，美術館図書室は，美術館員，専門研究者等に制限している場合が多い。例えば，フリック・コレクション美術館の図書館は，西欧絵画に関しては最も充実した図書室と言われるが，その利用は純粋に専門研究者に厳しく制限されており，ニューヨーク近代美術館やメトロポリタン美術館でも，図書室利用には特別の許可が要る。これらの美術館では，普通図書の貸出しは認めない。
スライドの貸出しも，学校，民間団体を対象として特に地方において活潑であり，例えばクリーヴランド美術館のスライド室には，臨時のアルバイトも含めて，常時五人の職員が整理貸出し事務にあたっている。
美術館の組織に関しては，director，curator，assistant 等から成るいわゆる curatorial staff（わが国の専門技官，学芸委員にあたる）が中心であることはヨーロッパと同様であるが，特にアメリカにおいて顕著なのは，どこの美術館にも，Registration（作品管理部）と呼ばれる独立の部局があって，作品の管理，および資料の整理にあたっていることである。この作品管理部には registrar（作品管理官とでも訳すべきか）と呼ばれる管理官がいて，作品状態の点検，データーの収集，記録の整理を受け持っている。例えば，美術館が所蔵品を貸出す場合，あるいは特別展や研究調査等のために借用する場合，出入りのたびに作品を点検して異状がないかどうかを調べるのは，この registrar の仕事である。また，所蔵作品，借用作品について，材質，寸法，所在，所蔵歴，展覧会歴等を調べて，それらの資料を整理するのもやはり regis-

trar の守備範囲である。したがって，registrar は当然そのための教育を受けた専門家であるが，しかし curatorial staff の仕事である展覧会の企画立案，およびその組織，購入作品の選定，作品の展示，調査研究，教育等の活動には参加しない。例えば，特別展を催す場合，その企画，交渉，組織，展示，カタログ作成等は当然 director や curator が行なうが，実際に作品が到着した際の点検やカタログのための資料整理，写真撮影の立会い等は registrar に委ねられる。すなわち，registrar は純粋の専門家ではないが，美術館活動のかなり実質的な面を支えているのである。

したがって，当然 Registration は充実したスタッフを擁している，ニューヨークの近代美術館では，所蔵作品，借用作品をあわせて，毎年1,000点から1,500点の作品が出たりはいったりするが，それらの作品のために，assistants も含めて，12人の registrars がいる。美術館が活潑な活動をすればするほど，貸出し，借用等による作品の移動が激しくなるが，そうなればいっそう充実したスタッフによる作品の管理が必要となることは当然である。アメリカの美術館におけるこのような行き方は，この点で大いに参考となるであろう。

また，どの美術館においても，作品の保存や修理のために多大の努力を払っていることは，ヨーロッパの美術館の場合と同様である。ただ，多くの美術館が民間の資金で運営されているアメリカでは，フランスやイタリアのように国立の大きな研究所や修復センターはなく，それぞれの美術館にそのための施設があり，専門の技術者が配置されている。ただ，きわめて高度の専門知識や特殊な熟練を要する保存修理の分野においては，すべての美術館があらゆる分野をカヴァーすることは困難であるので，当然美術館同志の相互協力や，大学その他の機関との密接な結びつきが強く見られる。例えば，ニューヨーク大学の大学院課程に相当するニューヨーク美術研究所は，ロックフェラー三世財団の寄附による充実した保存センターを擁しているが，ここはメトロポリタン美術館をはじめ，多くの美術館によって利用されているし，クリーヴランドの近くにあるオーバリン・カレッジの修理研究所は，トレド美術館やバルティモア美術館など，いくつかの美術館と特別の契約を結んで，その作品修理を引き受けている。

一般に，大学，またはカレッジと美術館の関係が密接であることはアメリカの大きな特色で，例えば有名なフォッグ美術館やエール大学アート・ギャラリーは，それぞれハーヴァード大学，エール大学の美術学科のための美術館であって，その curators たちは，当然大学における授業を受け持っている。また，メトロポリタン美術館の curators たちは，代る代るニューヨーク大学の講師となって，美術研究所の大学院学生の指導にあたっている。それによって，美術館専門職員の養成に積極的な役割りを果たしているのである。